

「中西印刷百年物語」



北海道写真製版の元祖 中西應策^{おうさく}



中西印刷の創業者、中西應策は北海道の写真製版の元祖といわれています。明治45(1912)年、北海道初の写真製版所である「中西寫真製版所」を創設以来、中西印刷の沿革は、本道写真製版業の発達史を物語るものでした。



養父・中西美暢

中西印刷の初代社長中西應策は、明治3(1870)年、桂家の三男として生まれ、その後、写真師である中西美暢^{みのぶ}の養子となりました。養父である美暢は元松前藩士でしたが、明治10(1877)年頃、榎本武揚や土方歳三などのポートレートや創建時代の札幌など北海道開拓事業の記録写真を残した日本写真界のパイオニア、田本研造に入門し、写真術を修行。その技術を身に付けた後、青森市米町(現在の本町5丁目付近)の中西家へ養子に入り、写真師中西美暢として塩町(現在の青柳2丁目付近)に写真館を開業しました。美暢の妻も写真術を身に付けており、特に修正が得意で、大いに内助の功を發揮したといえます。

美暢は、地方の写真師としては出色の腕前だったようで、明治33(1900)年の第5回パリ万国大博覧会に写真を出品し、銅メダルを受賞しています。



田本研造と田本寫眞館(明治11年4月28日撮影)
越崎宗一著「北海道写真文化史」より

小川一真に弟子入り

應策は父から写真術を教わりました。しかし進取の気性に富み、向上心に燃えていた應策は、到底一地方の写真師だけでは満足できませんでした。16歳の時、意を決し単身上京。当時洋行帰りで評判の小川一真の門を叩き、弟子入りを乞いました。しかし、一介の田舎少年に過ぎない應策の申出など簡単に容れられるはずもなく、けんもほろろに断られたのですが、諦めずに何度も歎願した結果、ついに小川もその熱心さに感じ入り、弟子入りを許したのです。

小川は、應策の技量を試そうと東京市内の風景を撮影させたところ、大変質の高い写真ばかりだったので、その中からセレクトしたものを小川が『東京百景』として世に出し、好評を博しました。

小川は、アメリカ留学中、ボストン市のアルバートタイプ社で写真製版とコロタイプの技術も身に付けていたので、應策をその担当者とし指導しました。小川の写真網目版法は感光液を銅版面に塗布し、舶来のスクリーンで網目版を作り、これを感光液が塗られた銅版面に焼付け、洗い出し、バーニングをして過塩化鉄の腐食液で腐食させるという方法であったといえます。

当時朝日新聞が軍艦の銅版図を附録として発行することになりましたが、大変な作業で、注文を受けた應策らが苦心の末、ようやく完成させることができました。おかげで師の小川も大いに面目を施すことができ、大変喜んだそうです。

小川は一般の需要にも応ずるため、明治21(1888)年、京橋区日吉町に小川写真製版所を開業していますが、應策はこの前後10年程、師の許で修行したあと青森に帰り、写真とコロタイプを業としました。

道内写真製版の夜明け

明治33～34年頃には、田本研造が門人の池田種之助（後に函館で池田写真館を開業）を青森市にやり、應策の許でコロタイプや写真銅版を修行させました。その後、應策は池田と共に函館に渡り、北溟社の伊藤鑄之助の後援を得て、田本写真館内にコロタイプ写真銅版を設備しました。函館で初めてアイヌ民族の風俗写真をコロタイプにした当時の試刷りが市立函館博物館に秘蔵されていますが、これはまさに北海道で作成された写真銅版の先駆けといえるものでした。

明治41（1908）年5月、應策の母方の叔父福土謹吾が札幌区南3条西4丁目に民芸社という新聞雑誌取次店を開き、次いで南3条西3丁目に工場を設け、その写真製版技師として應策を札幌に招きました。道内写真製版の歴史はここからスタートしました。

不幸にして明治42（1909）年12月、工場が全焼。翌年1月、北2条西2丁目（元商工会議所隣）に移転しました。

民芸社は一般の製版の外に銅版図入りの画報なども出版していました。当時、佐藤俊蔵・菅初次・徳下章・村中修治の4名が應策の弟子として勤めていましたが、佐藤は明治44年5月小樽新聞の製版を引受け、菅は函館池田写真館に移って函館毎日新聞の銅版を担当、村中は小樽北門日報社に入り、徳下は残って北海タイムスの製版を担当するなど、應策の直弟子は、揃って北海道の新聞文化に大なる貢献をしました。



大日本職業別明細圖（昭和11年発行）



中西寫眞製版所（大通西5丁目）

中西寫眞製版所創設

明治45(1912)年4月、應策は独立し、北1条西2丁目に北海道初の写真製版所となる中西寫眞製版所を創設、同じ年に狸小路に移転しています。当初、コロタイプのみで事業を始め、銅版の仕事は民芸社で行っていましたが、福士が東京に引揚げたため、銅版も始めました。

当時コロタイプは主に高級用として画帳などに用いられ、銅版は新聞・雑誌・その他一般向きとして利用されていました。應策は、従来の木版に代わって新聞広告に使用された垂鉛凸版の需要にも応じています。

札幌のコロタイプは信伊奈写真館が先鞭をつけ、次いで二六堂が始めたのですが、信伊奈のコロタイプ機械の一部は後に中西の工場に入っています。

中西寫眞製版所は、大正5(1916)年には、大通西5丁目へ移転しています。

應策の人となり

應策は、すこぶる意志堅固で研究心に富み、頭脳明晰で技術も優秀だったといえます。一面非常に義理堅い人で、父美暢の師である田本研造の負債を肩代わりするために、自分の大切なカメラを質に入れたというエピソードも残っています。

大正13(1924)年4月21日、應策は55歳をもってその一生を終えました。

中西寫眞製版所は、息子吉之助・慎吾の兄弟が継承し、本道に於ける唯一の写真製版所として、昭和18(1943)年に活版印刷部門を増設するまで、写真製版一筋に歩みを続けていくことになります。